

# 住

## 名古屋東部造園組合

### 限られた空間に

### 自然の美を表現

#### 専門職としては千年以上の歴史

日本の庭づくりは長い歴史を持っています。平安時代には日本最古の庭園書である『作庭記』が書かれ、石をうまく使い、各地の名所などを手本とし、山川草木を配すること、といったことが述べられています。つまり、美しい自然を表現しようということで、石立僧いしたてそうと呼ばれる庭づくりを専門とする人が活躍しています。

天白区が独立して区になったのは昭和50年(1975)、緑区は昭和38年(1963)です。かつてこの地域は果樹栽培他農業が盛んで、そのかたわらで副業として庭木の手入れなどを行っていました。ところが昭和34年(1959)に東海地方を襲った伊勢湾台風によって果樹等が大きな被害をうけ、造園業を専業とする人たちが増えていきました。その頃、日本経済は成長し、戸建て住宅の需要とともに、庭づくりの関心も高まっていました。そして国の制度である技能検定試験が始まり、昭和49年(1974)に名古屋東部造園組合が結成されました。

#### 青年部を立ち上げ、新しい庭づくりを探究

組合が結成された時は44社が加盟していましたが、現在は天白区、緑区の13社です。日本庭園の



1級造園技能士の実技試験の課題。この庭を3時間で製作する



高木の枝の剪定

基本でもある石組からの庭づくりを希望する人の減少も大きな原因となっています。また、新築戸建の建設はハウスメーカーが外構工事を含めすべてを行うことがほとんどです。そのため、庭づくりは塀、門扉、カーポートなど敷地回りの工事と一緒にやることになり、庭木のみを植える機会に巡り合うことが難しくなっています。また、庭木の手入れも、専門職に頼まないこともあります。例えば寺院では知識のある檀家が行ったりしています。そのため、造園師が行うのは3メートル以上の高木だけということもあります。

立派な庭のある家であっても、世代が替わるとマンションに建て替えられ、庭がなくなってしまう場合もあります。従来の庭づくりだけでなく、豊かな暮らしを楽しむための生活空間づくりのアイデアの創出や発信が求められています。そこで令和2年(2020)には青年部を立ち上げ、これまでのしきたりなどに囚われない自由な発想での議論を行っています。造園に興味のある若い女性も増えています。これまでの技能を守りながらも新しい「庭づくり・管理」の探究、技能講習を通じての「庭師づくり」を行っています。